

好奇心 いっぱいであること、 好きであること。

Guest
Interview

ゲストインタビュー

ジャーナリスト、作家、そして元日本銀行副総裁、現在は総合電機メーカーの研究所のトップと、多彩な顔を持って活躍しているのが藤原作弥さんです。藤原さん自身、専修学校制度が発足する以前の1960年ごろ過ごした学生時代、各種学校でアルバイトをし、自らも友人と学習塾を経営したという経験の持ち主です。30周年を迎えた専修学校に向けて、エールを送っていただきます。

藤原作弥氏

株式会社日立総合計画研究所代表取締役社長

——専修学校制度は、2005（平成17）年7月11日に30周年を迎えました。

藤原 おめでとうございます。制度を設立させるまでの道のり、そして、この30年にわたる教育の充実に努められた皆さまに敬意を表し、お祝い申し上げます。

——ありがとうございます。さて、専修学校では、「職業教育」をキーワードに、これから社会に出て行くこととする若者、そして現在、職業につき、さらにブラッシュアップしようとしている方々、そして、生きがいや楽しみとして学ぼうという方々に学習の機会を提供しています。

藤原 「論」だけの勉強ではなく、社会で活躍する手立てを自分のものにする学びということですね。

例えばアメリカでは、コロンビア大学でジャーナリスト養成のコースが用意されています。しかし、日本の大学では聞きません。そうしたスキルを習得し、あるいはアートなどのセンスを磨くことができるのが専修学校なのでしょうね。

成功を収めるには、適性やカンなど、訓練以外の要因もあります。しかし、チャンスを与え、訓練を通して、その職業への意識を高めることの意味は大きいですね。

「この仕事をしたいー」という気持ちに応える専修学校

——藤原さんは、どのような「職業教育」を受けましたか。

藤原 私は、新聞社などにニュースを卸売りする

通信社で記者をしてきました。駆け出し時代は、いわゆる「サツまわり」といって警察でニュースを拾う修業をしてきました。現場で学ぶOJT（オンザジョブトレーニング）です。

私は、8歳で敗戦を迎え、満州から両親と弟妹たちと命からがら逃れ、1年半、中国で難民生活をしました。今思えば、大人相手にタバコ売りなどをしながら送った日々は、もつとも鮮烈な職業教育になっていたように思います。

——いいですね。

藤原 大人の世界をのぞいてみたいという好奇心と放浪癖。これがジャーナリストとしての自分につながったように思います。

——人が職業に就き、自分を高めていくコアとなるものは何でしょうか？

藤原 やはり、好奇心、そして、この仕事が好きだ！ この仕事をしたい！ という思いでしょう。

専修学校は、そういう気持ちに、実にタイムリーに応えていますね。ニートと呼ばれる若者たちもモチベーションを高めていくきっかけづくりができる可能性を持っているのではないのでしょうか。

一人ひとりのキャリアデザインに的確な学びを用意

——大学を出て専修学校で学ぶ人も増えています。

藤原 私のまわりには、仕事をしながら自分をレベルアップさせようと難関資格に挑戦している人がたくさんいます。自分のなりたいたい姿を描いてステップアップするのに、専修学校の学びは明確ですね。

また、生涯学習という面では、収入を得るための学びだけでなく、ボランティアなど社会参加への道を開く大きな役割を専修学校は果たしていると思います。

——海外の職業教育事情はどうですか。

藤原 かつてスイス政府の招きで、スイス各地を巡ったことがあります。ノーベル賞受賞者を輩出している高等教育機関とともに、街には、アルチザン（職人）の養成機関が充実していて、そこからパン職人も映画監督も巣立っています。まさに市民の学校であって、すばらしいと思いました。

——これからの専修学校について、メッセージはございますか。

藤原 最近では、PPP（プライベート・パブリック・パートナーシップ）ということがいわれています。官民連携で暮らしやすい地域を作ろうということですね。そのため勉強の場として大学が名乗りを上げていますが、専修学校がその役割を担ってほしいだろうと思います。

また、時代を先取りする感覚に優れているのが専修学校ですが、新しい分野というのは、信頼できる技術が確立するまでに、多少時間が必要とすると思います。信頼性の確かな教育で若者たちを導いていただきたいですね。これについては、専修学校界全体で取り組んでもらえたら、と思います。みなさんのさらなる発展を願っています。

Profile

1937年生まれ。1962年、東京外国語大学フランス学科を卒業して時事通信社に入社。オタワ、ワシントンの特派員を経て、1994年、解説委員長。1998年、日本銀行副総裁。2003年より現職。
主な著作…「素顔の日銀副総裁日記」「李香蘭 私の半生」（共著）「わが放浪―満州から本石町まで」など多数。

子どものころからの
ものづくりのワクワクが
原点だった。

Guest
Interview

ゲストインタビュー

専門学校でインダストリアル・デザインを学び、株式会社本田技術研究所に入社、オートバイのデザイナーとして活躍してこられた秋山泉さん。グランプリのチャンピオンと次の最速マシン開発に取り組むなど、世界を舞台に多忙な日々を送っています。子どものころから模型づくりが好きだったという秋山さんは、立体が得意なことがきっかけでワクワクする喜びを職業へとつなげていったのが、専門学校での学びだったと語ります。

秋山泉さん

株式会社本田技術研究所朝霞研究所デザインブロック研究員

——オートバイのデザインをなさっているとお聞きしました。

秋山 はい、そうです。二輪車の外装デザインをしています。主に欧州、北米向けの大型オートバイを担当してきました。

世界で一番速いオートバイにする

——外装デザインといいますが？

秋山 タンクやカウル、シート、メーターなど大物から小物までオートバイの形を設計部門やテスト部門と連携しながら創っていく仕事です。

オートバイはライダーが乗った状態で空気抵抗を考えます。テスト部門で風洞実験やコンピューター解析を行いながら一緒に進めていくのですが、デザイナーとしては人が乗った状態だけではなく、置いてある状態でのスタイルも大切なんです。これをどう両立させるかが腕の見せどころですね。

またオートバイの世界ではMotoGPという四輪でいえばF1にあたる世界グランプリレースがあります。こうしたレースに参戦する機種のデザイナーも入社2年目から係わってきました。レースの世界ではスポンサーの広告塔としての役目もあり観客へのアピールが特に求められます。

——グランプリの栄冠の舞台裏で、デザイナーのこうした活躍があるんですね。

秋山 レースに勝てば、その機種をベースにした量産モデルの売れ行きも伸びますから。

特にレースの歴史の長いヨーロッパではファン層も厚く、注目度も違ってきます。スポンサーのイメージカラーやロゴのバランスなど、スポン

サー所属のデザイナーと綿密に打ち合わせをしています。

——仕事の舞台がグローバルですね。専門学校で学んだことは、どのように役立っていますか。

秋山 各分野の第一線で活躍されている方が先生で、もの創りに対する姿勢といえますか、仕事の原点を教わったように思います。

私の職場は、「どの学校を出たか、ではなく、何ができるか」という社風があり、専門学校での実践的な学びが活かされます。

プロの仕事が先取り体験できた専門学校時代

——どんな学生時代でしたか？

秋山 専門学校時代は、ひたすら課題に追われる日々でした。マンセル色見本に合わせて調色して、何十色というチップを作ることから始まり、醤油注しのデザインでは石膏をガリガリ削ったり、講評用のコンセプトボードを手書きしたり。小学生のときからものをつくるのが好きでしたから、時間のやりくりは大変でしたけど楽しかったです。

先生方のアドバイスは明快でした。自分の意図を的確に伝えること、求められているのは自分の作品ではなくお客さまのオーダーに応える量産品であること、そして日程厳守。これがあった、お金がいたただけるようになる、と。

——社会に出て、そのまま通用する教えますね。

秋山 学内ではパッケージやインテリアなど多角的にデザインを学び、「こういう考え方もあったのか」と、自分を広げることができました。

課題の合間を縫って、他学科から誘われたアルパイトもいい実地訓練でしたね。デパートのショールウインドーの入れ替えを閉店時から翌朝までに終わらせるという仕事で、目が回りそうでしたが、仕事の段取りがいかに大事か、この時に覚えたこと今では思っています。

——集まる学生も多彩ですか。

秋山 学生から進学してきた人だけでなく、職業経験がある人も同級生にいましたから。幅広い年齢層でしたが、デザインを学ぶ人は、みんな「いいものを創ろう」という意気込みを持っていました。そんな中で光るために、自分から何にでも顔を出し、突っ込み幅広い知識を吸収することで実践力をつけようとしていましたね。

——女性のインダストリアル・デザイナーは珍しかったですか？

秋山 家電の分野で女性が活躍されていました。専門学校は、よき先輩像に触れることができる場でもあったのです。

——自分の将来に悩む人にメッセージを。

秋山 自分が何になりたいのか、じっくり考える時間を作ってください。

私の場合は何をしたいかを文章化して明確にし、それをどう実現していくか考え、行動に移してきました。大事なものは、いつまでに何をやるという期限を設定すること。それが夢への第一歩だと思います。

Profile

1967年生まれ。1980年、専門学校桑沢デザイン研究所インダストリアル・デザイン研究科卒業。1982年、株式会社本田技術研究所朝霞研究所入社。主に大型オートバイの外装デザインを担当。1983年からHRC（ホンダレーシングコーポレーション）のオン・ロード・レーサーのカラーリングを担当し、現在にいたる。